

激動の経営

方針巡り隙間風

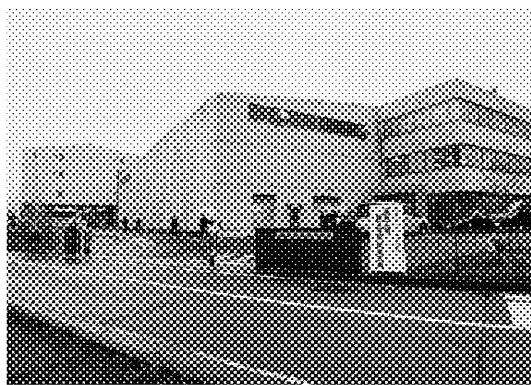
1999年に独GEA社と協業、03年の大阪工場完成と基盤を固めていた日本熱源システムだが、売り上げが10億円を超えた辺りから成長が踊り場を迎えた。政治記者だった長男の克彦だ。

日本熱源システム ②

た。社長の原田昌彦の次男が海外企業との交渉役だったが退社し、会社の方針を巡り幹部社員間に隙間風が吹き始めていた。

昌彦は会社の行く末を思い悩んだが「さまざまな人からの支援や出資で創った会社。ここで諦めては応援してくれた人に申し訳立たない」と再起を決意。GEA社との交渉役として白羽の矢を立てたのが、米国の大学院を卒業し、NHKの政治記者だった長男の克彦だ。

独社と交流、再起決意



日本熱源システムの滋賀工場（4月に新2号館開業式典を開催）

克彦は94年、NHKに入局。名古屋放送局を経て、政治部で小淵恵三総理番、森喜朗内閣の安倍晋三官房副長官番、小泉純一郎内閣

の福田康夫官房長官番などを担当する一線記者として活躍していた。そんなある日のこと、経営面で昌彦を支えてきた顧問から「会社が存続の危機だ。NHKをやめて入社して

くれ」と打診を受けた。克彦は「NHKに不満はなかった。局内からも、なんでやめるのかと引き留められた」と悩む。

冷凍機、産業用に参入

苦悩と焦り

思い悩んだ末、家業を継ぐ決意をした克彦は04年に日本熱源システムに入社。ビジネスや経営の修行を始める。だが「技術も知らず何ができる」と社内での目は冷たく、古参幹部の支持も得られな

繁にドイツを訪れた。相手を知る

そこでGEA社という世界的圧縮機メーカーと技術提携しながら「うちの会社はその技術を理解できていない」と気付く。克彦は相互理解のため日独の技術者交流を開始。そうした中、GEA社から「空調用ヒートポンプが得意なのは分かるが、本来わが社のスクリーン冷凍機は食品や化学など産業用冷凍に使うもの。産業用に冷凍機を売ってくれないか」と提案があった。提案を受け入れた克彦は若手社員と2人で各

地を駆け回り回ったが、産業用分野では無名だけに苦戦を強い

08年には原子力発電所向けの冷凍機を受注。克彦は10年に社長に就任し、11年に原発向け事業強化のため試験設備を持つ工場（現滋賀工場）の建設を決めた。しかし同年3月11日、東日本大震災が発生した。

（敬称略）